

4年目を迎えた広島でのドラマ・ワークショップも、無事終了しました。2日間の日程の中に、セミナーやフォーラムまで盛り込んだ過密スケジュールでしたが、これからの新たな展望につながる意味深い講座になりました。

これまでの広島の参加者の特徴として、子どもたちは、演劇そのものに興味がある子、新しい体験に挑戦してみたい子など、主に中学生以上が中心で、数名ずつの顔見知りはいるものの普段全く関係性のないメンバーで実施していることです。学校などで実施する同質性の集団でのワークショップと違って、各自がリラックスできるための時間が必要になるという点ではありますが、幅広い年齢層の主体的な参加意識から繰り上げられるイマジネーションの世界はとても刺激的です。

今回も「1万円札」という1つの小道具からいくつものドラマが展開されました。子どもたちの1万円に対する価値観の違いに驚きながら、そこから1つの正解を求めていくのではなく、各自が持ったイメージを表現しそこから家族・学校・友達の関係性などに広げていく展開は、思考力や表現力低下の改善策を具体化できない関係各位にぜひ見学してもらいシーンでした。

子どもたちはワークショップを通して、顔の表情、目線、身体を使って他者とコミュニケーションできることや、相手の表現に対して積極的に関わろうとする姿勢が、相手への理解につながっていくことを実感していきます。それは同時に、3時間という枠の中でまとめあげていくケ

「ドラマ」をとおしての可能性 ～子どもNPOとしてのこれから～

小笠原 由季恵

theatre & Policy no.47

ネス・テイラー氏の存在の重要性を示したということでもあります。こういう場に出会うたびに感じることは、関わりあう大人のセンスです。何気ない一言で膨らんでいたイマジネーションが一瞬にしてトーンダウンしてしまうという現場を見るたびに、良い指導者の養成を早く！と願わずにはいられません。

広島での過去のワークショップの指導者養成は、中心メンバーが演劇関係者でした。自分たちの演劇的スキルを社会で活用したいという思いの人たちです。残念ながら、今回は、他のいくつかの演劇事業と重なり、いつもの演劇関係者の参加が困難だったことで、顔ぶれが随分変わりました。教育関係者（遠くは静岡、大阪からの参加者もいらっしゃいました）に加え、教育学部の学生、今まで演劇には縁がなかった街づくりの関係者といった方々です。目的意識も、経験も多様なメンバーのワークショップを展開するケネス・テイラー氏にとって、子どもたちの時以上に大変だっただろうと思いますが、新たなメンバーにドラマの持つ力を実感してもらうとても貴重な場になったと思います。初体験の参加者は、表現する楽しさと同時に、グループで協同して創っていく意味も感じ取っていったようです。

まずは、第一歩というところです。

theatre planning network

シアター＆ポリシー 通巻47号
2008年2月20日発行
編集・発行人 中山夏織

特定非営利活動法人
シアタープランニングネットワーク
〒182-0003
東京都調布市若葉町1-33-43-202
Phone & fax 03-5384-8715
e-mail tpn1@msb.biglobe.ne.jp
<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~tpn/>

私たちのドラマ・ワークショップへの取り組みは、今を生きる子どもたちが「生きる力」をどう獲得していくかというとても大きな課題に挑戦していくことでした。そして、この4年間の実践の場をとおして、そのことが少しずつ具体的なイメージになっていったように感じています。

広島にとって、この4年間で第1ステージと考えるならば、ドラマ・ワークショップを通して、子どもたちの気持ちが開かれ、他者とつながっていくことへの不安や恐怖が安心や関心に変化していくことを参加者に示し、ドラマの可能性を感じ取ってもらう時期だったと思います。

次の第2ステージでは、ドラマとシアターそれぞれの役割と、それが効果的に機能するための人材と場を具体的に提示していくことだと考えています。

特に今回2日間の講座の後に行われた小学校でのドラマの授業を見学し、ドラマ・エデュケーションは学校現場で継続的なカリキュラムの基で実施されることが、その効果を社会的にも立証できると改めて確信させられたわけです。

また、実際に学校の授業として組み込むためのプログラムづくりが、教育研究者を始め演劇関係者等で現在検討されており具体化する可能性が高まっている現状を思うと、子どもNPOとして、これからの私たちの役割りの見直しと、その上での具体的なプランの提示が必要になってくると考えます。

自立した市民として社会を構成していくための学びとしての「ドラマ」の存在は、学校以外の居場所での活用や、地域づくりを考えている多世代の人をつなぐスキルとして、演劇人の社会性を育む場として、など広く求められていくのではないかと考えています。これまで、広島で発掘した資源を活かしながら試行錯誤の第2ステージが始まります。

(おがさわらゆきえ / 特定非営利活動法人
子どもコミュニティネットひろしま代表理事)



広島でのワークショップ風景。上3枚が青少年対象、
右2枚が指導者対象。

あうるすぽっと
アートマネジメント
研修生＜報告＞
Number 1

公共劇場という“場” 豊島区の劇場として

内田 阿紗子

公共の劇場は何をすべきか？

私が研修を始めて一番引っかけたのがこの問いであった。あうるすぽっとの研修を始めてから、公共の場としての劇場のあり方を模索する場面がいくつかあり、そのひとつのコミュニケーションの手段として、私たちが企画・制作したワークショップとセミナーがあった。公共劇場の役割として、私は漠然と「多くの人に劇場に足を運んでもらうきっかけをつくり、公共の場として人々が集うことに意味がある」と考えていた。そのために、ワークショップを開催することで、人々が親しみやすい企画を提供でき、舞台芸術に興味を持つきっかけをつくる事が出来ると理解していた。また、子どもを対象とすることで、観客の幅も広がり、地域のネットワークも生まれ「地域の芸術文化の発展」に貢献するのではないかと考えていた。

しかし、実際に研修を始め、実践と様々な研修の授業を通し、人々が集うようにするには具体的にどのようなプログラムを企画すればいいのか。また「人々」とはいったい誰をさすのかという問いを感じ始めた。糸口を発見したきっかけになったのは「この企画はどの範囲の観客に向けての企画なのか、だれを対象に考えるのか」という研修の時間だった。その時初めて、「半径の距離」で足を運ぶ観客を想定し、対象をしぼる考え方を知った。「半径」でわけて考えることによって人々と劇場の関わりかたの違いが見えてきた。

半径500Mの範囲で対象をしぼる＝町内会の範囲

近くに住んでいる人にとって有効であること、演劇好きでない人にもきっかけ作り、ボランティアに参加

半径5KMの範囲で対象をしぼる＝市または区のくくりでひとつのカテゴリー

他の公共施設との関係性が生まれる、区や市のカテゴリーとしての役割が問われる、演劇好きには嬉しい

半径50KMの範囲で対象をしぼる＝都や県のくくり

TV・新聞の情報が同じ、演劇専門機関との関係性が生まれる、演劇好きにとって足を運ぶ範囲内

このような範囲に分けた対象を考えたときに、ひとつの公共の劇場がひとつひとつの企画をどのように広報していくのか、対象を設定していくのかということがとても重要な鍵になるのだと気づいた。そして、その設定こそが公共の劇場としての役割を明確に示しているのではないかと。時には、本当に身近な市民に対しての企画であり、時には演劇好きな人に向けての企画であり、対象を明確にすることで「公共」という言葉が持つ形が見えてくるのではないかと。様々な範囲に対象を動かし企画できることこそが、公共の場としての地域劇場の利点であるのではないかと。

私たちが開催したワークショップは子どもを対象としたもので、豊島区の中でも重点的に東池袋周辺に広報をした。あうるすぽっと開館前ということで、一番身近なところに範囲をしぼったのだ。地域の小学校に通う子どもに親しんでもらいたいという気持ちだった。しかし、広報が遅れたこともあり、参加者のほとんどは私立に通う子どもであった。広報の難しさを改めて実感した。そのような矛盾を感じながらも、劇場に足を運んだことのない子どもが何かを持ち帰り、笑顔になって帰っていく姿を見ると、地域に劇場があり身近な市民を対象に企画をたてられるということはやはり素晴らしいと感じた。

7ヶ月間の研修を終え、最初の問い「公共の劇場は何をすべきか？」の答えは出ていないが、少なくともひとつのワークショップを実施したことで、公共の劇場としてのひとつの役割を見ることができたと思う。その経験は、私に改めて「公共の劇場」の魅力と可能性を教えてくれた。

(うちだあさこ / 武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科4年在学中)

出会いと学びの7ヶ月

澤野 理絵

あうるすぽっと
アートマネジメント
研修生 < 報告 >
Number 2

あうるすぽっとのアートマネジメント研修生の間、「あうるすぽっと」は、自分にとってアイデンティティでもあり、試練と学びの場でもあり、そして何よりも出会いと交流の場でした。

開館前の劇場で式典や公演のお手伝いをさせて頂いたことも大きな経験ですが、「エデュケーション・プログラム」を担当するという試練に対し、期待と不安と覚えながら、研修が終わる頃には確信と誇りを感じるようになったことが最も印象的な経験です。そして、この7ヶ月の間、多くの機会を与えて下さり、温かく見守って下さった周りの方々にとっても感謝しています。こういう仕事をしたいと思える場所にいられたことも幸運でしたが、こういう人になりたいと思える人々に沢山出会えた事が、自分の人生を変えたように思います。

研修期間で得た確信とは、まさに、「公共文化施設において「エデュケーション・プログラム」が必要である」ということです。特に、「物語」「歴史」「言葉」「音楽」など多くの資源を持ち、「理性」にも「感性」にも刺激を与える「劇場空間」においては、その活用方法が多岐的、かつ、有効的であり、芸術鑑賞に留まらない、相互的な影響を持ち得る「場」を創造することができるということを、身をもって体感しました。そして人々はその体験を通して、個人としての創造性を高め、市民としての自覚を高め、交流の楽しみと価値を再確認することができるのだということを、講師やコーディネーター、そしてワークショップの参加者の姿から学ぶことができました。これは、公共文化施設の管理が自治体から離れて指定管理者に移行したとしてもその「劇場空間」の資源は変わらず、常にその有効的活用を「ミッション」として意識するべきものだと思います。また、日本全国に広がる質の高いそれらの施設において、「エデュケーション・プログラム」を行うことをスタンダードとすることで、学校教育と同じように、もしくはそれ以上に子どもたちの社会的関心度に影響を与えることができるのではないかと感じます。アートマネジメントといってすべてが「経営」に左右されるのではなく、長期的なスパンでの芸術教育普及を「運営・調整」していく力が、時代の流れと共に求められており、すでに、「したほうがいい」というよりも「するのは当然」で「どのようにしたら良いか」ということを真剣に取り組む段階に入っているという実感がありました。

同時に、そのような施設において、エデュケーション・プログラムを発信していく「エデュケーション・オフィサー」の存在が必要であることも忘れてはなりません。自分自身、あうるすぽっとでの仕事は主に「エデュケーション・オフィサー」の研修であったと感じています。実際、誇りすら感じるようにまでなった自分の携わったプログラムも、自分自身の力は微々たるもので、力を合わせた仲間と、あうるすぽっとの皆さんとコーディネーターの人脈とお力添えがあったからこそそのものです。将来、自分の力で企画を動かすことができるようになることを目標とすると共に、このような企画の先駆の方々に尊敬の念でいっぱいです。

また、組織となれば制約はつきもので、自由にできないことは沢山あります。今回、あうるすぽっと、財団法人としみらい文化財団、豊島区、NPO法人シアタープランニングネットワーク、劇団昴など、様々な組織の連合体のもとで研修したことで、それぞれの特性や制約も感じながら、棲み分けがきちんとしてきている連合体ならば一つの組織で事業を行うよりもずっと大きな力を発揮できるのだ、と実感し、自分の力で企画を動かすようにできるだけではなく、様々な組織をつないでいく力を身につけたいと感じました。

これから様々な人生の選択があると思いますが、その時は必ずこの7ヶ月を思い出したいと思います。そしてあうるすぽっとでの様々な出会いがこれからもずっと続くよう願って止みません。

(さわのりえ / 東京学芸大学教育学部芸術文化課程表現コミュニケーション専攻4年在学中)

あうるすぽっと
アートマネジメント
研修生＜報告＞
Number 3

伝えることの難しさと伝わることの喜び

大藤 多香子

半年間のあうるすぽっとでの研修を終え、一ヶ月が経とうとしている。少しずつ整理されてきた頭で、あらためて半年間の事を思い返してみた感想は「楽しかった」ということだ。月並みで単純な言葉だが、劇場が生まれる瞬間に立会い、演劇が作られていく傍らで仕事が出来たことは私にとって最高に楽しい時間だった。

なぜ楽しかったか。それは「学ぶ」ということが楽しかったからだ。このプロジェクト、この場所、この人々との巡り合わせだったからこそ実現し得た学びの場が、この研修には溢れていた。そして、私が学んだことを整理してみると「伝える」というキーワードが思い浮ぶ。

研修が始まってからすぐの仕事はケネス・テイラー氏によるドラマ・イン・エデュケーションのワークショップの運営である。初めはドラマ教育の実態すら掴めず、ケン先生が何者なのかも分からない、そんな状態での参加者集めは困難を極めた。参加してくれるような子供や、演劇に興味のある保護者がどこにいるのか、どうやったらこのプログラムの存在を伝えることができるのか、効果的なチラシはどうするか。企画書ひとつをとっても情報の並べ方や言葉の選択で指導され、何回も書き直した。言葉は悪いが、そもそも何が「売り」なのか。公共の原理において見落としがちな要素を、初めは雲を掴むような感覚で探っていった。そして知れば知るほどドラマ教育の魅力に出会い、なんとしても多くの人に参加してもらいたいという気持ちが強くなった。しかしその術が見つからない。広報活動において「伝える」ということがどんなに難しいか実感した。課題は山積みだったか研修生全員で問題を解決していくプロセスは確かな充実感を生んでいった。

3回シリーズで開催した「生命」のワークショップでは、演劇に初めて触れるような参加者の顔に、じんわりとドラマ教育の楽しさが伝わっていく様子を見ることができた。また、シリーズを通して継続的な広報を進めるうちに私達の研修自体に興味を持ってくださる方もいた。地道に続けた働きかけが、ぼつりぼつりと確かな反応になって返ってくる実感があった。

表現やコミュニケーション教育において演劇が持つ可能性は極めて大きい。最近も友人の医大生が授業でインプロをやったと言い連絡をくれた。確かに医師として患者とのコミュニケーションは重要である。これから社会が複雑化する中で、青少年が社会に出てから要求されるコミュニケーション能力は高度なものになっていくだろう。そんな時、傍らに演劇があって欲しいと思う。演劇は時に心を開放する。私は自らドラマ教育を体験することでそのことを実感した。そして、他人に何かを伝えることは容易な事ではないが、地道な働きかけは必ず実を結ぶということを私はこの研修で学ぶことができた。この経験は、私にとってアートの世界以外でも確かな自信となってくれるに違いない。

ところで、私はこの研修期間中に遣り残したことがある。それは劇場の周りを歩くことだ。あうるすぽっとでの研修が決まった時、劇場周辺を歩いてどんな町に在るのか知らなくてはと思った。地域の公共劇場として、劇場から発信された情報がどのように住民に伝わっていくのか、実際に見てみたいと思ったのかもしれない。未だに劇場と住民との距離感はずかぬが、これから新しいコミュニケーションが始まっていくことに期待したい。

この研修から学んだことは他にも書ききれないほどある。しかし、短い言葉で的確に物事を伝えるということもこの研修で学んだことのひとつだ。

最後にお世話になった劇場の皆様、共に挑んだ研修生仲間、研修期間に出会った多くの方々、そして研修プログラムを用意してくださり、暖かく見守ってくださった中山先生に御礼申し上げたい。ありがとうございました。

(おおふじたかこ / 明治大学文学部演劇学専攻 4 年在学中)

あうるすぽっとでのアートマネジメント研修を終えて

舟川 絢子

あうるすぽっと
アートマネジメント
研修生 < 報告 >
Number 4

公立文化施設におけるアートマネジメント

今回の研修でインターン生の中心的な活動の一つとなったのが、8月に行われたケネス・ティラー氏によるドラマ・イン・エデュケーションプログラムと、生命のワークショップシリーズ、そして劇団昴の『クリスマス・キャロル』といった種々のワークショップの企画・運営でした。とりわけドラマ・イン・エデュケーションの実際の現場に少しでも触れることができたことは、私にとっても今回の研修における大きな収穫のひとつになりましたが、こうした教育事業や地域交流プログラムの提供など、舞台芸術という資源を上演以外の形で積極的に地域のために活用することは、公立劇場のひとつの使命であると感じました。

もうひとつ感じたのは、「舞台芸術の創造・発信・育成の場」である公立劇場であるからこそ、舞台芸術を本当に求めている人に提供することにこだわるべきである、ということです。それができることが商業の劇場が持たない公共劇場の最大のアドバンテージであり、それゆえに創り手のモチベーションを下げる劇場であってはならないということは公共劇場の最大の責任であると考えました。

総括・反省

インターン同士の人間関係に恵まれたことは、本当に大きな幸運でした。特定のリーダーが不在という特異な関係も、全員が同じくらいの問題意識と抱負、そしてお互いに対する敬意や責任感を持っていたことに支えられたものであったと思います。早いうちから気心の知れた仲になれたことでお互いに忙しいときにはフォローしあえるという心のゆとりが生まれたことも、特に、大学院入試直前などにはありがたいことでしたが、同時に、その信頼感は常に甘えと紙一重のところにもあり、あの精一杯の時期にその甘えを戒めきれていたか、自信が持てません。

私にとってこのインターンの経験は、アートマネジメントについてと同等かもしくはそれ以上に、社会人になるとは何か、大人になるとはどういうことかを考えるまたとない機会となりました。電話の受け方、連絡・報告のしかたなどを体当たりで身につけ、時に、職員同士の本音の会話を聞かせてもらいながら、複数の人間がひとつの組織を構成して様々なプロジェクトを動かしていく現場を目の当たりにしたことで、将来自分がどのような社会人になるかということを初めて真剣に考えました。それだけに、日々の業務をこなしていくことに汲々とし未消化に終わってしまった課題も数多くあったことを悔しくも思います。

研修中疑問に思い、ついに解決しなかったのが、あの場でインターン生にどの程度の責任があるのか、またないのかということでした。インターンという身分にかかわらず時にかなり重大な仕事をさせていただいているという実感があり、とてもありがたいことである一方で、インターンとしての立場をはかりかねる時もありました。また職員の方々もインターンの扱いについては手探りの部分があったのではないかと感じました。しかし、今振り返ると、なぜそれをわからないままに過ごしてしまったのか、職員の方や他の研修生に相談するなどして解決できたことなのではないかという反省が残ります。

また常に時間的・精神的余裕のない中で、ワークショップの反省点をマニュアルに残す、記録を整理するなどひとつひとつの成果の後始末をつけることをおろそかにしてしまったことも大きな反省のひとつだったと思います。またインターン同士でも、それぞれの仕事や課題を共有することができればさらに有意義な研修になったと思います、そのためにあったはずの研修日誌を活用できなかったことも悔やまれます。

そして、最も大きな反省点は、あうるすぽっとの研修生という存在自体を各方面にもっとアピールできればよかったということです。私たちの存在自体が、あうるすぽっとにとって、TPNにとって、アートマネジメント全体にとってのひとつのプロジェクトであり、そのプロセスや成果を発信することも私たちの大きな責任であるという意識をもっと強く持ち続けなければならなかったと思います。

(ふなかわあやこ / 4月、東京藝術大学大学院音楽研究科入学予定)

あうるすぽっと
アートマネジメント
研修生＜報告＞
総 括

個人技からチームへ—インターンシップ研修論

中山 夏織

慢性的に構造的に人材が足りない芸術組織にとって、インターンシップは諸刃の剣である。即戦力、そしてとにかく人手が欲しいという側面と、多忙ななかで教えなくてはならない、インターンシップ用の仕事をわざわざ用意しなければならないという側面が入り混じるからである。それでも、アートマネジメントを教える大学や大学院が増えるに連れ、その人材の「現場性」を培うという社会的・教育的責任から、インターンシップ研修は花盛りの様相を示すようになってきた。

だが、戸惑うことがある。現場でのアートマネジメントというものは、教えられるものではなく、学ぶものなのじゃないかということだ。教えてくれるものもなく、ただ現場をいくつもさまよいながら、見よう見まねで、試行錯誤でキャリアを培ってきた世代の癖みかもしれないが、「準備され予定されたプログラム」のなかで学ぶだけで、この仕事に生き、生き抜いていく力を獲得することはできないのではないか。

あうるすぽっと＜豊島区立舞台芸術交流センター＞のワークショップ事業担当の劇場アドバイザーとして、この開場準備からオープニングの主催事業全部を体験するインターンシップを提案したのは、2007年2月のことだ。体制もシステムも整わないなかで、当初、劇場側が無理という答えが返ってくるのを予測していた。だが、予測は裏切られ、まさに「混沌」を体験するための少しばかり無謀なインターンシップ計画が決定された。4月中旬募集開始、5月初旬書類選考、中旬面接、そして、5月31日、7ヶ月に及ぶ研修プログラムがスタートした。

劇場スタッフにはあえて「インターン用の仕事」を用意してくれるなどお願いした。見よう見まねと試行錯誤という「学びの原点」に戻らせるためだ。私個人としては、研修生たちには自分たちの現在を自覚し、失敗を経験させたいという思いがあった。もちろん、守られた環境のなかにおいてである。その仕掛けとして、開場のプレ・イベントとしての「ドラマ・イン・エデュケーション2007」を研修生たちに託した。教育・トレーニングの側面を理解できる海外招聘講師であったこと、その招聘元がTPNであったから可能だったことだ。私にとって難しかったのは、自分でやってしまえば早いものを、たぶんに待ち続けなければならないという点にあった。指導する側はつい待てなくて手をだしてしまいそうになるが、手をだしたとたんに、研修生たちが自ら学び獲得するプロセスを崩してしまうことになる。

この最初の試みがきっかけとなって、劇場スタッフはほとんどのワークショップ事業の運営・管理業務の多くを研修生たちにゆだねることを決定した。英断だったと思う。もちろん、大学の講義や論文、就職活動などの自分の日常、日々の劇場に溢れる雑用のうえにその重責がのしかかるため、研修生たちはほとんどパニック状態に陥った。だが、この余裕のないパニック状態が、互いに競争するのではなく、「コンセンサスを形成」しながらも、「リーダーシップが固定せず」、「その仕事をしている人が権限を持ち」、「自己責任を負い」、「やりとげる」という「チーム」を作り上げた。背景も性格も異なる研修生たちが、小さな失敗を繰り返しながら、次第に「チーム」として成果をあげていくプロセスに、私はささやかな「オルフェウス・プロセス」を見た。舞台芸術は協働のアートであるにもかかわらず、日本のアートマネジメントは協働性に欠き、とにかく個人技を誇りたがるアーティスト的性質をもつが—アートマネジメント教育でもそのような内容が教えられることがある—それに対して、いかにして「チーム」として成果をあげるのかを研修生たちは体験から学んだのではないだろうか。公共劇場がいかにあるべきかを考えるだけではない、宝物を研修生たちは獲得した。それこそが新しい時代のアートマネジメントにつながるのではないだろうか。

(なかやまかおり / アーツコンサルタント)

編集後記

日本劇作家協会、子どもコミュニティネットひろしま、三原キッズステーションとともに、はじめて冬にドラマ・イン・エデュケーションのプロジェクトを展開しました。今回は、これまでの指導者向けワークショップが中心ではなく、子どもたちが対象。実際の学校現場でのモデル授業も実施されました。ケン先生とともに訪れた学校は、広島大学附属三原小学校2年生、杉並区立富士見丘小学校5年生、筑波大学附属駒場中学校有志(2年生中心、1年生が若干名)の3校。3つのまったく異なる年代の子どもたちです。これまで指導者向けプログラムが中心だっただけに、まだまだ幼い小学校2年生たち(80名!)とのワークショップはけっこう刺激的なものでありました(ひゃー、元気ですよ、ほんとに)。先生方の日頃の暖かく忍耐強い愛情と、大変さをいっぱい認識した次第です。

一番ドラマ教育を必要とする世代でありながら、最も指導が難しいと言われているのが、中学生たちです。しかもエリートの男子校ということもあり、筑波大学附属駒場中学校でのモデル授業に際しては、少しばかりかまえてしまいました。ところが、日頃の教育の成果でしょうか、少年たちの伸びやかな自主性、民主性に一気に心ほぐれ、うれしくなっていました。頼もしい。

二つの小学校、そして三原キッズステーションでのモデル授業&ワークショップの骨格となったのは、イワン・ガンチェフの絵本を素材にした「二つの島」のエキササイズです(ドラマ教育ではかなり知られた素材です)。よく似た島でありながら、緑溢れる島と灰色の都会の島という、まったく異なるプロフィールをもって発展した二つの島をめぐる、様々なドラマが展開されていきます。子どもたちのグループ性、成熟度、授業の目的によって、この素材は、自在に変貌していきます。実際、富士見丘小の五年生二クラスの進行の違いは、見学されている方々にもたぶんに示唆的なものがあったのではないのでしょうか。早ければいいということではなく、要は理解の深さであり、ドラマ教育は、その子どもたちの学びのスピードに対応していければいい…。そんなこ

とを強く感じました。

「二つの島」のエキササイズの醍醐味は、二つの島のコミュニティそのものをまずは自分たちで描き、作り上げていくことにあります。子どもたちは誰も絵を描くことが大好き。学年も性別も関係なく、幼い子どもたちでも負けずに、というよりもより積極的に参加することができます。

模造紙をつないでさらに大きくつないだ大きな紙に自分たちのコミュニティの「部品」を続々描いていくにつれ、どんどん子どもたちの想像力が膨らんでいきます。自分たちが描いたからこそ、誰かに押しつけられたものではない「所有感」のようなものを子どもたちは獲得しています。そのコミュニティの音(木々のそよぎ、川の音、工場や車の騒音など)を出すのも(サウンドスケープ) また外来のお客様を案内するにも、子どもたちにははじめてのこと。それでも、最初は戸惑っていた子どもたちがだんだん誇らしげになっていったのが印象に残っています。自分たちが描いた二つの島が今後の授業のなかで、先生方の手でさらに発展し、活用されていくことを望んでいます。

子どもたちとの出会いは一期一会、再会することはまずないし、再会しても違う存在へと成長していて気づくことはありません。素敵な経験をさせていただいたことに心から感謝しています。(中山夏織)



theatre & policy

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク(TPN)

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンケージを目的としています。

2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

theatre & policy シアター & ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行(隔月間・年6回)されています。定期購読をご希望の方は、TPNの準会員としてご参加下さい。

年会費3千円(送料込み)を下記までご送金下さい。尚、送金の際は、ご住所・氏名・電話番号を忘れずにご記入くださいますようお願い申し上げます。

郵便振替口座 00190-0-191663

加入者名 シアタープランニングネットワーク